

下頭橋サロンを見学して

2005.8.10

協同
の
は
2
2

青木未知（協同総合研究所）

げとうばし

下頭橋サロンとは、板橋区にある高齢者の集いの場である。私の住まいが近くということで紹介を受けたのだが、私の祖母が毎日寂しいと言いながら一人暮らしをしていることもあり、高齢協理事の高橋さんに連絡をとり見学させてもらうことにした。

2005年8月4日の正午前、暑い日差しの中、自転車で下頭橋サロンへ向かった。サロンは板橋区川越街道沿いの交差点の角にある喫茶店のようなところにあった。ガラス張りの壁からは何か作業をしている女性達の様子が見え、中に入ると裁縫をしている女性たちが笑顔で迎えてくれた。よそ者であり世代の異なる私でもすぐにスッと溶け込めるような雰囲気であった。ネクタイからできた筆入れ、広告でつくったカゴ、新聞でつくった花の飾り、周りにあるものが全てサロン参加者による手づくりだそうで、文化の宝庫のような空間である。サロンでは参加者それぞれが先生になり、太極拳、裁縫、唄など、得意なことを皆に教える形で進めている。「針に糸が通らないわ」といいながら作業を進めている傍らには、完成した周りの品々を見ると綺麗でかわいらしい小物がたくさんある。このような文化の宝庫をこの場だけにとどめるの

はもったいないような気がした。これらはお金を出せばすぐに手に入れられる物とは違い、「これはどこで誰に教えてもらったのかなあ」とか、「筆入れにかわったネクタイにはどんな歴史や思いが込められているのかなあ」等考えたりすると感慨深いものがあった。



ネクタイからできた筆入れ

当日午前中の参加者は10名でほとんどが70代、80代の女性であった（うち世話人2名、高橋さん 男性、私を含め見学2名）。この日の作業は参加者の一人を講師としたパッチワークで、8月後半の展示会へ向けての作業だという。皆おしゃべりをしながら和気あいあいと作業を進めていた。

お昼は一食550円、お弁当ではなく、お盆の上に器がのった形でお弁当屋さんが運んでくれる。当日のメニューはロールキャベツ、にんじん、茄子のおひたし、サラダ、味噌汁、ご飯、つけもの。午後にはティー



お昼の様子

タイムがあり、お茶代が200円。そして10時から開いていたサロンは午後3時に閉店となる。

サロンの成り立ち

サロンは、参加者の一人Aさんの娘さんが高橋さんに「母がふさがちなので心配だ」と相談したことが発端で、ちょうどAさんが喫茶店用のスペースを持っていたことから、2002年11月、下頭橋サロンがオープンした。募集は主に区報、口コミである。

参加者の話から感じたこと・課題

サロンの中は楽しくゆっくりと時が流れていた。しかし、目の前は川越街道でたくさん車がビュンビュンと通っていて、サロンの中と周りの環境のギャップを感じたのも事実である。

本当はこのようなサロンをもっと広げたいと思っているのにもかかわらず、週1回の

ボランティアを探すのでさえ難しいそうだと(高橋さん)。参加者の中にはバスで通っている人が数名、遠くは埼玉から通う人もいるという。一見どこにでもありそうな光景なのに、下頭橋サロンは今では貴重な場になってしまった。ここに週1回ボランティアで参加しているBさん(60代女性)は、他にデイサービスの仕事を持っているが、「先輩方の生き方、料理、戦争などの話を聞くのが楽しい。皆が喜んでくれるから続けていきたい」と話している。

参加者からは、「近所とは挨拶くらいで深い付き合いはないわね。昔はサロンのような集まりがあったようだけど、老人会の会長さんが亡くなったりしてなくなっちゃったみたい(Cさん・70代女性)」とか、「最初はわずらわしさがなくて快適と思っていたマンションが、仕事が終わった途端に寂しいものだとなったの(Dさん・70代女性)」という話を聞いた。Dさんは、仕事を引退してから閉鎖的なマンション生活の中、何をしたいかわからないという状況下でうつ病になったという。そして娘さんに誘われ散歩をしているときにサロンと出会った。現在ではうつ病も治り、「皆と楽しく交流のできるサロンがあって良かった」と話している。

平日は元気に仕事をしていて、休日は遊びにいったり逆に一人の時間を楽しんでる私は、まだ地域社会の大切さを身にしみて感じることはない。マンション生活なので、隣人がどこの誰で何を考えている人なのかかわからず、会うのが怖いという気持ちで足早に部屋へ駆け込んでいく。しかし、仕事がなくなったり、病気をして体が弱く

なったりした時に、身近で人と交流できる場・楽しめる場がないという現状は、何か寂しくておかしいと思わざるを得ない。

とはいえ、普段から信頼関係を築くような関係を保っていないのに、病気になったり仕事がなくなった際に隣人だからといってすぐに助け合う関係になるのは難しい。仕事を持っていて元気な人でも、普段から地域社会と触れ合って信頼関係を築いておかなければ、いざという時に助けを求めるときもできず家の中に閉じこもることになってしまうだろう。現代では多くの場合、勤務地は都心部に集中しており、仕事をしていると時間に余裕がなく地域社会に参加することが難しくなる。隣人がどんな思いで生活をしているのかもわかりづらい。隣人は他人と言えば他人であるが、天災や何か問題があったとき等いざというときに助け合うべき存在であり、全くの他人とは言い切れない。それでは仕事に忙殺している現代人が、普段から地域社会に触れ合い、挨拶を交わすだけではない信頼関係を築くためにはどうしたらいいのであろうか、疑問が残る。

参加者であり場所を提供しているAさん(80代・女性)は、「こんなにいいサロンになるなんて思っていなかった。私は元々人の中に入るのが好きではなかった。でも皆さんいい方で楽しくてよかったなあと思う。」と話している。Aさんは、最初はあまり話をしなかったが、今は笑顔でよくしゃべるようになったという(Bさんの言)。AさんやDさんのように、皆で和気あいあいと交流することで元気になったという話を聞き、家から一歩外に出るだけで気軽に集えるような場がそれぞれの地域にあればいいと思う反面、集ま

る場所が見つからなかったり、週1回でさえも時間を割いてくれるボランティアを見つけることが難しいという現状に、ではどうしたらいいのかと次に考えるべき課題を次に残した訪問でもあった。

また、下頭橋サロンは主に女性たちが集まる場となっているが、高橋さんはできれば男性が集うサロンもつくりたいと考えている。長い間社会で働いてきた男性たちが集まって楽しむ場とするためにはどのようなテーマを掲げればいいのか、ボランティアと場所の確保の問題とともに考えていきたいと語っていた。

最後に、私は今の住まいに引越してまだ1ヶ月。マンションの管理会社のことで悩んでおり、高橋さんがその領域でも活躍されているというので相談したところ、「地域の業者が一番信頼できるから何かあったら紹介してもらいなさい」とサロンのメンバーで近くに住む方を紹介して下さった。はじめて地域の「顔の見える隣人」ができ、今まで不安だった気持ちがだいぶ和らいだ。この日は本当に地域社会の大切さを実感した一日であった。皆さん、ありがとうございました。



下頭橋サロン入り口

図1. サロンの成り立ち要因

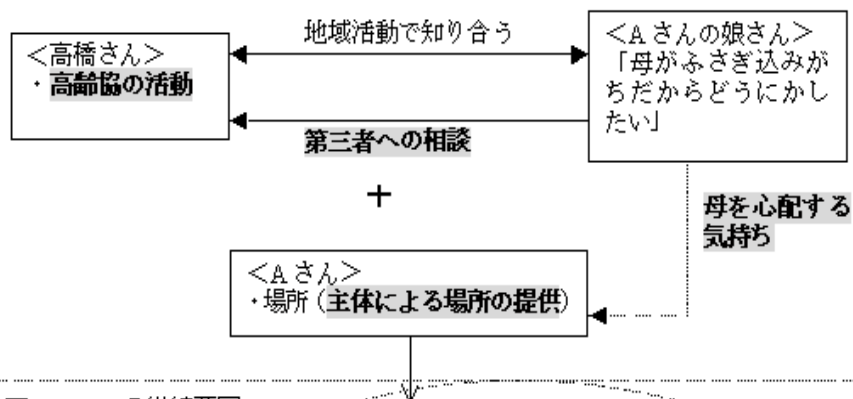


図2. サロンの継続要因

